牧水歌碑と愛の鐘

中津市長　奥塚　正典

歌人若山牧水、明治 40 年に広島県、山口県を超えて九州に入り豊前の国耶馬渓を訪れます。そこで一首

〈安芸（あき）の国超えて長門にまたこえて豊の国ゆき杜鵑（ほととぎす）聴く〉

本耶馬渓青の山国屋に泊まり、その宿でまた一首

〈ただ恋しうらみ怒りは影もなし暮れて旅籠（はたご）の欄に倚（よ）るとき〉

「二首耶馬渓にて」という詞書がある歌で、青の洞門の対岸に歌碑が建てられています。若山牧水と言うと、「白鳥（しらとり）はかなしからずや空の青海の青にも染まずただよふ」を高校時代に習い、「旅する、恋する　酒を愛する歌人」として興味を惹かれたものです。牧水が当地を訪れ歌を詠んでいることは、知人に教わるまで知りませんでした。

そこで最近牧水に関する本を読んでみました。二首目は、牧水の初恋の歌だそうです。牧水の代表作と言われる「幾山河（いくやまかわ）越え去り行かば寂しさの果てなむ国ぞ今日も旅ゆく」と同じ旅の中で歌われたものだと牧水研究家の大悟法利雄さんが著書「観賞若山牧水の秀歌」で明らかにしています。

先日本耶馬渓オランダ橋のたもとに鐘が設置されました。商工会の皆さんが制作したもので、その名は「愛の鐘」。若いカップルがオランダ橋を渡り除幕式で鐘を鳴らしました。清流山国川の岸辺で鐘をならし若い二人が愛を育む。熟年カップルが若いころを思い出す。まだお一人の方なら鐘を鳴らすと新たな出会いが生まれる。恋人同士のプロポーズの場所として 8 連の石橋の上で愛の告白なんてロマンチックですね。家族や親子の愛もきっと深まるでしょう。

牧水歌碑

頼山陽が耶馬渓と命名して 200 年。牧水をはじめ多くの文人が耶馬渓を訪れ愛でています。青の洞門を通りオランダ橋を渡る。愛の鐘を鳴らす。山国川沿いに上流に歩き牧水の歌碑へ。自然と愛が織りなす散策コースです。